

モラルの時代 —— 融和の21世紀を築く

第二の開国, 日本—ユニークさからユニバーサルへ
連帯を築く国際チームワーク
思いやりとわかちあいの世界家族

1983年第7回MRA国際会議開催

Odawara - Osaka - Kobe - Tokyo



その他の内容

- 東京ダイアログ 6P
- ソン・サン首相来日 10P
- あの時 この人 12P
- アメリカ、ポートランド会議 16P



普遍性をもった地球規模でのモラル、価値基準の確立を目指して

五八年度MRA国際会議



新しい価値観をもとにした国際連帯とチームワークを築くべく、今年も5月27日から29日にかけての小田原国際会議を皮切りに、31日から6月5日までは関西地区で、同6日から11日までは東京を舞台に第7回MRAキャンペーンが繰り広げられました。

“モラルの時代—融和の21世紀を築く”をメインテーマに各地で活発な交流がなされました。東京では初の試みとして、

国際ダイアログが多彩なゲストを迎えて、当協会主催日本経済新聞社後援として開催され好評を得ました。(別掲)

今回の海外代表は、初参加のフィリッピン、パプアニューギニア代表などをはじめ12ヶ国54名を数えました。又、マスコミ等で報道されたので承知されている方も多いと思いますが、民主カンボジア連合政府のソン・サン首相もMRAキャンペーン参加のため来日されました。(別掲)

小田原会議では今回進行に司会に、多くの有志の方々の御協力を頂くことが出来、フレッシュな息吹きが感じられました。今年は分科会に「MRA入門コース」が設けられ、初めてMRAの会合に参加された方々を中心に活発な討論がなされ大いに効果を上げました。

韓国、中華民国からは今回主に、若い人達が会議に参加しました。特に韓国には、日本の有志により開かれたバザーの売り上げが、1人でも多くの若い人が来日出来るようにとの願いを込めて送られ、費用の一部に充てられました。

小田原終了後、海外代表は東芝の御厚意により箱根の同社保養所に招かれ、労使の方々との懇談の機会を得ました。その後関西地区でも神戸ダイアログを初め多彩な行事に参加し(別掲)、相互理解の促進に務めました。



ジェフリー・クレイグ

日本で迎える二度目の夏、そして父の来日

◇世界の幸せのために働く
ペロニカ、フィリッパ、そして私の三人が日本に来て既に一年余りが過ぎ、その間日本の山の家庭で暖かい歓待をうけ、それらの家庭を通していくらか本場の日本人の生活を理解することが出来感謝しています。東京や大阪、神戸といった大都市の家庭ばかりでなく、栃木・茨城・静岡・神奈川などでも家庭滞在させていただきました。又、私達の方からもバグ・パイプやスコティッシュダンスなどを通じて英国文化の一端を紹介することが出来たと思っています。

日本の生活にもだいぶ慣れてきました。もち論、外出を容易にしてくれる英語の道路標識や案内がどこにでもあることや、英国同様に車が左側通行なので私にとって運転がそれ程難しくなかったことなどもあります。又、日本食も大好きで、お箸の使い方も上手になりました。ただ、納豆だけはどうしても苦手です。

ペロニカと私の両方共が、日本語の学校へ行くことが出来て二人共喜んでいきます。正しい日本の姿を理解する為には、日本語は欠かせないので一生懸命勉強しなければならぬと思っています。また、日本語学習の困難さに直面してみると、英語圏以外の人々が見慣れない綴りや発音、それに例外だらけの文法をもつ英語を学ぶことがいかに難かしい事であるかをはじめ実感しました。もち論、二才半になる息子のフィリッパは、英語も日本語もすばらしい速さで学んでいるようです。

私達は、海外でMRA活動に奉仕してきた多くの日本人達への小さなお返しとして、日本

のMRAチームと一語に働けることを感謝しています。国家間に於ける貿易摩擦や経済論争が問題になっている今日、世界の幸せの為に共に働くことを学ぶという事はとても大切なことです。それに、フィリッピン、ホンコン、そしてインドで働いていたことのある私達にとって、再びアジアに戻って来る事が出来たことも嬉しい事でした。

私達にとっては昨年に続き二度目の参加となる、小田原会議が今年も開催されました。海外からも、私の父をはじめとし沢山の参加者を迎える事が出来ました。

実際、私にMRAの思想を一番最初に紹介してくれたのは両親でした。そして、自分自身が世界の問題の一部であるよりは、むしろその答えとなる人間になるべきであると気づいた時、私はMRAの思想を自分の人生に取り入れる決心をしました。次に、自分の人生について静かな時間を持って考え、父と正直に話し合う事を決心しました。こうしてお互いが正直になったおかげで、私達はすばらしい親子関係そしてより良い理解を見出

すことが出来ました。父にも良い助けとなったようです。そして、私達は自分達の事ばかりに追われる代りに、他の人々の事を考える余裕が出来ました。父は長年にわたり、産業界でMRA活動を続けて来ました。父は、一九五五年にMRAのグループと共に初来日しましたが、今回二度目の来日が叶えられて本当に良かったと思っています。今回の日本滞在について父が書いたレポートを紹介したいと思います。

● ジョン・クレイグ

失業に苦しむ欧米では、日本が欧米のマーケットを征服してしまうのではないかと感じたり、日本の能力や技術革新による支配に恐れを抱いている人々がいます。

又、アジアでは日本の過去への記憶が時折、周辺諸国に日本の行動に対する疑惑や恐れを引きおこしています。このような日本への恐れは、貿易摩擦の危険を大きくしていますし、近代科学技術が人類の生活水準やその質を向上させてくれる機会をも破壊してしまうでしょう。今回の日本訪問は短いもので

したが、私達が共に働くことを学べるという確かな希望を私に与えてくれました。もち論、そのためにはお互いの伝統を破壊することなく欠点を取り除き、そして長所を伸す方法を確立するための、お互いの根気強さや正直さといったものが必要とされるでしょう。その点、これは世界中で良く知られていることです。行動を起す前に意見の一致を求めるといふ日本の習慣が、一つの例となるでしょう。

日本で働いているあるカナダ人の会社員が、このことについて幾つかの意義深い見解を述べています。第一に、日本人がグループ内の反対者を、どのようにして彼らの自信や価値観といったものを損う事なく同調させることが出来るのか、彼にどうしていまだに謎であること。(この方法は、欧米ではやや軽蔑的に「面目を保つ」という風に評されてきました。しかし実際には、英国産業界の殆んどの交渉に於ける最終段階でこの方法が用いられているのです。)

第一に、個々の獨創性というものが、意見の一致を求める過程において犠牲にされるかもし

れないという点で、それが最良の結果を生むかどうか疑問であること。

第三に、この方法は時間がかかるので、中長期のプランニングには適するかも知れないが、市場の変動により素早い反応が要求される場合など、日本人はその能力を十分に発揮できないのではないかといいことでした。

日本の今日までの成功にもかかわらず、経団連の指導的立場にある人がこう言っています。「多分、日本はすでにその能力のピークに達している。そして現在、アジア諸国、特に韓国・台湾、そしてシンガポールから流れ込む低価格商品の台頭に直面している。しかし、日本や欧米にとって、そういった輸入品の波から自分の市場を守ることが可能であると思う」。しかし私は、もしこの様な現象が津波のように押し寄せてきたら、保護貿易政策を抑制することは困難になるということを認識すべきであると思います。

この様な状況にもかかわらず、日本が単に考慮するだけにとどまらず、実際に他国への輸出規制を受け入れているという事実

は欧米も学ぶところが大きいと思います。恐らく日本人は、国の安全や存続というものには支配によって保障されるものではないことを、歴史を通して学んできたのでしよう。日本には、友情を基盤にして安全を求めようという気運があるのです。

二十世紀の人間は、大きな環境の変化に直面しています。いわば私達は現在、地理的な一つのユニットの中で暮していると言えましょう。もはや個々の大陸の孤立はなくなりました。もし私達が、どの国が最強で支配力が有るかを証明することによって自国の存続をはかろうとすれば、人類を滅ぼしてしまう恐れがあるでしょう。

モンペルラン・ソサエティの日本委員会会長の木内先生は、今私達は市場経済における競走基準を見直す必要があるのではないかと、勝敗をノックアウトで決めるボクシング型から、ベストプレーヤーをコースのスコアで決めるゴルフ型へ移行すべきではないかと、と問いかけています。これはなお一層発展させるべきすばらしい考えであると思います。

海外代表、国鉄高木総裁と会見……………永井和夫

6月7日、MRA小田原国際会議に海外から出席した6人のMRAメンバーと、国鉄・高木総裁との懇談がもたれた。

まず、オランダのフィリップスさんから、新幹線のすばらしさについて賛辞がのべられ、鉄道技術の将来についてひとしきり議論がかわされた後、アメリカのモーアさんから国鉄労使の現状についての質問があり、高木総裁から国鉄再建には労使の協調が不可欠であるが、現状はまだまだ不満足な状況にあると卒直な回答があった。

モーアさんは引続き、御自身の会社での経験をもとに、労使がお互いに心を開いてじっくりと話し合うことが第一歩、それによって、相互不信が解消し協力関係が生まれる。これが労使関係の基本だと思う。それには労使一緒にスイスのコーを訪れるのが近道、総裁もぜひ一度行かれるようにと話された。

総裁もうなずきながら、その通りだと思うと答えられ、仲々忙しくて当分日本を離れられそうにないが、そのうちぜひ機会を作りたいと話された。

南アフリカのホフマイヤーさんは、新幹線コントロールセンターのすばらしさ、その重要な役割について語られ、MRAは人間の心のコントロールセンターであり、心の声を聞きそれに従って行動することがMRAの精神であると述べられた。

アメリカのスミスさんは、十河総裁の当時日本におられ、総裁が新幹線建設をMRA精神の発露として決意されたこと、世界銀行からの借款にまつわる苦勞などについて話され、高木総裁も新幹線は鉄道の新しい可能性を世界に示した点で高い評価を受けており、また国鉄経営の上で最も重要なものである。それを作られた十河総裁には心から敬意を表しており、皆さんからこのようなお話をうかがえて大変嬉しいと答えられた。

また、アメリカのギランさんは、ニューヨーク市が財政危機に瀕した時、労働組合が組合員の年金積立金を提供して協力したことを紹介され、労使協調のあり方について話された。当時、ニューヨーク市当局と関係労働組合との間は決して良好な状況にはなく、財政危機の原因についてもお互いに責任転嫁を主張するありさまでした。しかし双方の幹部が長い時間をかけて幾度も話し合った結果、お互い出来るだけのことでは実行しようという事になり、組合側は年金積立金を提供することになった。しかしこの決定を組合員は必ずしも支持せず、委員長は足を棒にして説得を繰返ささなければならなかった。即ち、誰が正しいかではなく、何が正しいかによって判断してほしいと繰返し主張したわけである。その甲斐あってニューヨーク市の財政は危機を脱し好転しつつあり、我々も安心して日本に来れるようになった。

このお話には総裁も大変興味を示され、いくつか質問をしながら熱心に聞いておられ、国鉄もニューヨーク市にならってぜひ財政再建をほだしたいと述べられた。

イギリスのマッコラツコラックさんは、英国鉄も財政状況が非常に悪く、労使関係も良いと言えない。日本の国鉄が再建されれば、それは英国国鉄にも非常に参考になると思うと述べられ、日本国鉄の再建を期待された。

これに対して総裁は、鉄道産業はどこの国でも、人件費の占めるウエイトが他企業に比較して大きく、その意味でまだまだ労働集約的産業である。それだけに人間関係、特に労使関係が経営上の重要なポイントになる。先日、英国国鉄のピーター・パーカー総裁が来日され、お互いの苦しい経営問題について話し合ったが、最後はやはり職員一人一人の心の再建、労使の相互理解が不可欠であるとの結論になった。今日のお話を参考に私も大いにがんばっていききたいと答えられた。

最後に、ホフマイヤーさんから、再度スイスのコーへの訪問を期待するお話があり、6人の署名の入った「フランク・ブックマンの精神とMRA」を贈って約1時間にわたる懇談はなごやかに終了した。

出来事

MRAとの出会い、あの日から五年！……………足立憲昭・尚子

私がMRAを知ったのは、1978年10月の関西MRA大会でした。当時、私は入社五年目で採用の仕事をしていました。きっかけは、小嶋さん（ジャスコ相談役）からの紹介でした。

その頃、私は家族（妻と生後3ヶ月の娘）を妻の実家に預け、別れて住んでいました。それは、採用の仕事が毎年8月から10月にかけて極端に忙しくなり、残業が続くからです。今から当時のことを考えると、ずいぶん妻は寂しい思いをしたんだろうと思います。

そんな複雑な気持ちでMRAと出会いましたが、初めは何が何だか全くわからずに大会が終わってしまいました。2年目の10月にも招待がありました。私は1年間何もしなかったので、恥かしく出席をためらいました。しかし、招待状の優しい文字に促されて思いきって参加しました。その時の大会で、皆さんの前で話することになりました。私は、次のように述べました。「人は誰れでも“良いもの”を持っています。ただ、その“良いもの”の上に心のほこり（ゴミ）がたまっているので気づかないだけです。私は私自身の心のほこりと私のまわりの人たちの心のほこりを取り除くために努力します。」

その時からずっとこの約束を果たすため、いろいろ実行してきました。私は、MRAに会社の仲間が参加するように働きかけました。ノルウェーのイエンツ氏にも会社のミーティングで講演していただきました。そして、最も大きな収穫は、私の妻と娘が、2年前に小田原大会へ参加したことです。そして、今年は、妻と2人の娘が参加しました。家族で参加すること。そして妻や娘と対等に話し合えること。これは、言葉では言えないくらい素晴らしいことです。

次は、妻からMRAの感想を述べます。

先日主人と3日間、午前2時頃まで、自分達の事、子供達の事等を話し合いをしました。毎日顔をつき合わせていれば、話し合わなくてもお互いにわかり合っているだろうと思っていました。しかし、やっぱり話し合いは必要でした。私は自分に対する正直さ、そして人に対する親切などを教えられました。私は今日からスタート。1日1日を大切に、子供達を大切に、そして家族を大切にしていきたいと思っています。



Osaka, Kobe

関西プログラム報告



小田原会議そして箱根での東芝労使代表との交流を終えて、海外代表一行は関西に向いました。用事で帰国せざるを得なくなったフィリッピン代表等に代わって、オランダ・フィリッパス社の元会長のフィリッパス氏、アメリカ・スコピル製造会社副社長のモーア氏御夫妻、そして中華民國の劉博士が関西で新たに加わり10ヶ国36名の陣容となりました。その模様を報告したいと思います。

ゼンセン同盟大阪支部にて労使問題のディスカッションを終えたグループと合流して、先ずは大阪を代表する日本料理の老舗である花外楼にて夕食にあずかるという栄を得ました。丁度、伝統的な舟乗り込みという行事も見られ、料理の味は勿論、その飾り付けの美しさ、そして様々に凝らした工夫にも驚きと感嘆の声が上がりました。花外楼の経営者、徳光氏よりもMRAの四つの道義標準に従業員教育の柱としているというお話しがありました。

さて翌六月一日には、今年で四年目となる関西経済連合会主催の午餐会が開かれました。ホスト役である阪本勇国際委員会委員長は、「毎年この交歓を楽しみにしています。昨年オーストラリアにあるMRAのトレーニングセンターのアーマーを他の関西連のメンバーと訪ねましたが、そこで日本の若い人が国際人になるための訓練を受けているのを見て嬉しく思いました。そのような訓練の必要性が今実感として分かります。」と言われました。ニューヨーク電気産業局のマッコミック氏の「先年、ニューヨーク市が財政危機に陥

った際、私と同僚のギリン氏を今回のこの会議に送った電気工組合ニューヨーク支部長、バナスデル氏の努力により、組合員の年金を用立てることによって市の破綻が救われた」という話は労働組合が地域社会のため大きな役割を果たした例として興味深いものでした。午餐会に引き続き、インドを初めとするアジアの国々に井戸堀のボランティアを送っている、アジア協会・アジア友の会を訪ね、お互いの体験を分かち合いましたが、その交歓は夜遅くまで続きました。

翌二日の大阪青年会議所主催の午餐会も今年で二度目になりますが、海外よりの代表にならない、御夫妻で参加されているのが目に付きました。

◇神戸ダイアローグ

同日神戸にて開かれたダイアローグには、主婦、経営者、教育関係者から各種宗教関係者、そして国際都市神戸を象徴するような様々な国際団体の代表等六十余名が参加しました。南アフリカで人種間の融和のために活動しているホフマイヤー氏は、一九五〇年にMRAの世界会議

に参加された、原口前神戸市長が、帰国後、「どうぞ」、「ありがとう」、「ごめんない」の三つの言葉を使おうという運動を始めたことに言及し、「これを神戸市が世界に教えることが出来れば人類への大きな貢献になる」と話し、中華民國の青年、王君は、「不幸な過去の歴史にとられることなく、日本人々と共に、心と頭と手を使って、新しいアジアを作りたい」と述べました。現在九十四才になられる中井元神戸市長の「日本人に対しての忠告を」という質問に答えて、アメリカのスミス氏は、「経済的に世界のリーダーとなった今、日本人は心を世界に開いてほしい。私達も共に進みます」と語りかけました。その言葉に応えるかのように、感謝がない、反省がない、相手の身になれない、という「わがまま」を無くす運動をしているとの神戸市婦人団体協議会の土井芳子会長よりのお話がありました。最後にこのダイアローグの世話人を代表して神戸輸入促進フォーラムの田嶋理事長は、「経済繁栄を達成した日本ですが、人の心は荒廃し、将来の目標を失ってしまったかのように見え

ます。心の運動をおこし、世界のために貢献しうる日本を作らねばと七年前から輸入促進運動を始めると同時に、神戸で色々な宗教・文化の交流を図ってきました。そんな折、四十数年前からMRAが広く世界中で同じ運動をしていることを知り感銘を受けました。MRAの四つの道義標準を行うには勇気が要りますが、一度壁をやぶれば非常に楽しくなります。それは世界の人々と共に自分の行動を起していきけるからです。この集りを機会に神戸でMRA活動が復活していくことを望みます」と結びました。

引き続きの夕食会には、小笠原兵庫県副知事、宮岡神戸市助役もご参加下さり、更に交流が深められました。

日本の伝統・文化に触れてもらった古都奈良での一日に続いて、六月四日にはMRA大阪集會が開かれました。老若男女六十名余りの参加者は、海外代表よりのお話を伺った後、小グループに分かれ、家庭の問題から国際問題に至るまで、「モラルの時代」融和の「二十一世紀を築く」というテーマを現実のものとするためのそれぞれの役割を見出すべく、熱心に話し合いました。

東京ダイアログ

■これからの世界、日本および日本人の役割



今、世界中で今後の世界の生存にかかわる最も重要な課題として、口先だけでない相互理解の促進、そしてその礎石ともいえる謙虚に相手を知りそして自らを正しく伝える努力がなされている。民間レベルでの相互理解を目指す国際ダイアログ“第二の開国、日本—ユニークさからユニバーサルへ”(国際MRA日本協会主催日本経済新聞社後援)が6月10日、日本青年館に内外より多数の参加者を得て開かれた。特別ゲストとして民主カンボジア連合政府ソン・サン首相も出席され、特別講演をされた。(別掲)尚、パネラーの一人として出席を予定していた亀井正夫氏は、当日が国鉄再建管理委員会初会合にあつたため止むなく欠席された。

パネラーによるプレゼンテーションは、5人のパネラーが各15分の持ち時間で簡潔にポイントを述べた。日本側は主にユニークさの整理より始まり、そこからユニバーサルに向かう展望について具体的に述べたのに対し、外国側はユニバーサルな生き方を実践してきた個人のユニークな体験を謙虚に語っていたのが好対象であった。その後パネラー同志によるダイアログ、フロアを交えたダイアログへと続いたが、その過程で矢野教授のいう「日本と外国との心ある人々との共同作業による第二の開国」は、「一人一人が自分の立場、責任において自分のなすことを心の声に聴く」(相馬雪香) ことによって始まることが示されたと思われる。

木内信胤氏(世界経済調査会理事長)は、コーディネーターとして次のようにまとめられた。

1. 日本のユニークさについての論議から始めた今日の会合は、日本側がユニークさを歴史の中にあるとしたのに対し、外国側はモラルの側面から分析し、日本がこれからすべき点についての発言が目立った。ユニーク性についてはかなり具体的に理解が深まったが、単なる理解にとどまらずこれからすべきことを実行していくことが重要だと思う。
2. 日本は存外ユニバーサルであることがわかった。日本人ほど外国のことを気にし、外国についての新聞を読み、東西文化の両方を合わせ持つ国はない。しかし、それ以上にユニバーサルが要求されるということは、日本がもっと寄与すべきであり、更にもう少し世界を知るべきであり、そしてもっと自分を充分説明すべきだということである。
3. ユニークさを殺すのではなく、ますます発揮し、かつモラルを前面に押し出すことによって必ずユニバーサルになることができる。決して孤立してはいけない。国がモラルの面で良い国になればなるほど、他の国がうまくいっていなければ胸が痛くなるようになるものである。逆に日本は他と対立してまで繁栄する必要はないのである。
4. これからの世界は一種の宗教の復活が必要である。自然科学があまりに偉くなりすぎて教育や人類全体を破壊しつつあるが、この自然科学を超えて使いこなすのが宗教の役目である。仏教国である日本人がもっとしっかりした仏教徒になることであり、キリスト教国であるイギリス人がもっとしっかりしたキリスト教徒になるということである。

●ユニークさとユニバーサルについて

矢野 暢



1. ユニークさとユニバーサルについて
ユニークとはいわば民族の価値のアイデンティティーであるのに対し、ユニバーサルとは人類のアイデンティティーであり、どちらが正しいといったものではない。ただし日本のユニークさには多分に外来的なものがある。
2. 対比概念を意識する日本のユニークさ
内と外、上位と下位、あちらとこちら、中心と辺境といった二元論的対比概念が日本人の価値観に存在し、このユニークさは特に7世紀と19世紀に強く意識された。その特徴は次の通りである。
- (1) 社会的にゆるやか(ルース)な時代であった。(幕藩体制の崩壊)
- (2) 世界の文明の中心からそれ

- (3) 第1の開国と第2の開国の比較
- 比較
- ＜明治の開国の特徴＞
- (1) イニシアティブが外からであった。(ペリーによる外圧)
- (2) 鎖国が国法であった時代なので開国は違法であった。(政府の正統性が低下した)
- (3) 開国の是非について理論闘争があった。
- (4) 革命が生じた。(明治維新)
- (5) 開国派(少数派)が軍事的占領体制をひいた。
- (6) 王制復古や文明開化をして

自己の立場を正統化する必要があった。

〈第2の開国に必要な精神的価値〉

明治維新とは全く違った精神的価値が必要である。マッケンジー氏の言われる、①相互依存の認識、②バランスの重要性、③経済とは道徳そのものである、という考え方に全く賛成である。

第2の開国のあるべき姿として、次のことがあげられる。

(1) イニシアティブは日本人自らとるべきである。

(2) 「鎖国から開国へ」という図式ではない。寧ろ世界の流れを適確にとらえることによって、第2の開国は容易であるべきである。

(3) 開国を唱える人が多数であり、政治的正統性を持つ。

(4) 相手が誰か、何に向けての開国か、というのが重要。欧米だけにかそれとも世界全体に向けてか、ということである。

(5) 開くパターンが重要である。

(6) 外界の文明的正統性も重要である。つまり第2の開国は日本だけの問題ではなく、日本と外国の心のある人々による共同作業である。

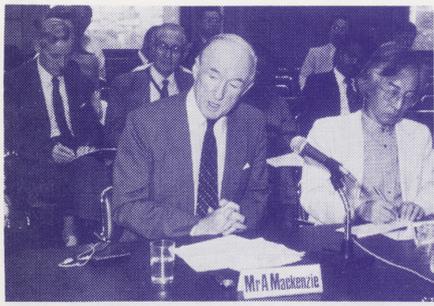
(京都大学教授)

●日本の新しい歴史の始まり

アーチャー・マッケンジー(英国)

1. 日本の新しい歴史の始まり
内向きな思考の国が多くなっている中で、世界における役割を外向きに模索している日本の姿は大変喜ばしいことです。戦後日本は独自のユニークな道を歩みました。国連や世界銀行などでも欧米諸国のような地位を与えられなかった日本が自国の復興のみにひたむきになったのは無理もないことです。

2. 世界の現状
現在の世界は先づ相互依存の世界です。昨年のメキシコの財政危機が世界の大手銀行の存亡にまで係わっていたのはい例です。次にこの相互依存の世界



が危険なまでにバランスを欠いていることです。私と同じスコットランド出身のアダム・スミスが「大多数の人々が貧しく悲惨な社会に繁栄と幸せはこない」といっていますが、これがまさにあてはまると思います。第三に現在の世界は道義的には後進的であるということです。同じくスコットランドの経済学者が「英国の経済問題の九〇%が道義の問題である。」と結論づけて

いましたが、この強欲さ、汚職、嫉妬といった問題を解決しない限り繁栄と平和の可能性はあり得ないと思います。

3. 日本の貢献
こうした世界に対する日本の貢献は今までのような経済面でのことに限られるのではなく、日本の体験を他国へ特に途上国に伝えていくことにかかっているとされます。しかもそれは物質的な援助にとどまらず、世界銀行のいうところの「人の開発」を伴ったものであるべきです。技術的な才能だけでなく人格を伴った「全人」が必要とされるのです。

「我々の最大の失敗は革命を担う新しい型の人間作りに失敗したことだ」とフルシチョフは言いましたが、これはアンドロポフにもあてはまりそうです。ここにMRAの使命があると思います。MRAは人や国が内から変わることによって、その人や国が持つ最も良いものを引き出すというユニークな役割を持つからです。そしてあふれる情報の中で静かな声を聞くことによって人間を越えた叡知を見い出すことを助けてくれます。

生活水準の向上ばかりでなく、生活の質の向上こそ大切ですが、品質管理にも長けた日本の役割も大でしょう。これからの日本は単なる低姿勢や高利益追求ではない新しい質のリーダーシップを発揮して欲しいと思います。勇気と能率を備え、かつ思いやりのあるリーダーシップです。

(元国連大使、元チュニジア大使)



●コディネーターの木内信胤氏



●バブアニューギニアとカンボジアから

(次ページへ続く)

●東アジア儒教圏共通のユニークさ

山本七平

1. 東アジア儒教圏共通のユニークさ

日本にとって一八六八年以前はユニークさはほとんど問題にならなかった。何故なら東アジア儒教圏の中では漢字があたかもエスペラント語のように通じて、日本人も中国人もお互いの詩を理解できるほどであったからである。つまり世界からするとこの地域全体がユニークだったのである。従ってこの既に共通のものをどう拡げていくかが問題である。

2. 日本のユニークさ
 (1) 日本のユニークさ、イコール、東アジアのユニークさであ



る。日本は世界帝国であった中国(唐)の影響を一貫して受けた。

例えば中国の国内法を以って国際法としたため、ヨーロッパの意味での国際法はなかった。同じように条約とか外交といったものも存在しなかった。

(2) 中国では道教・儒教・仏教は基本的に同一原理をもつと考えられ、所謂「神儒仏合一論」となって日本に影響を与えた。

江戸時代の町人は石田梅岩の「あらゆる思想は無駄にならない。業として使え」というようなプラグマティズムにたっていた。

(3) 日本の実力主義・競争主義は武家法(1233~1868)に基づくもので、過去の功績と能力の無無によって決まる「相続」や下が上を支配する「下剋上」がこの典型である。

(4) 日本の集団主義は中江兆民などの影響である。例えば日本における本来の契約の意味は集団規約を作って皆でそれに従うというもので一種の安全保障である。いわば実力主義がアクセル・集団主義がブレーキのよう

な役割を果たした。

(5) 形式は変えずに実質を変える、ということがあり、「たなあげ」というのがいい例である。

(6) 経済に敏感な民族であることは何も今に始まったことではなく、「金さえあれば何でも成功する」という考えは14世紀から存在する。物事を象徴的に考えるということである。

3. ユニークさと共に存在する共通項

ユニークな伝統をもつ日本ではあるが、他の国々と多くの共通点を持っている。例えばマックス・ウェーバーの「プロテスタントエティズムと資本主義の精神」の内容は結果的に日本と似ている。最近の日米労働者意識調査でも日本とアメリカの労働者が共に仕事に精神的充足さを感じるという、勤勉性が共通することが認められている。この調査によると、人生で最も重要な点、何を本位に生活するかという点で日米間で同じ結果が出ている。然も、単純な仕事を悪い環境下でも真面目に働くという点ではアメリカが日本を上回るが、月給の高低に拘らず日本人の方が自主性を重んじる、といった違いもあらわれた。

日本人がユニークと思のていることが東アジアに共通しているということもある。慶応大学の韓国人言語学者キルヨン渡辺さんによると、「何もございませんが、どうぞ召し上がって下さい。」「お口にあいませんでしようが、どうぞ」といった謙譲である。

4. 日本の階級関係

日本の階級は応仁の乱ではほぼ消滅した。つまりそれ以前の指導者が全部没落したからである。これに伴い最低の層から最高の地位に昇った人が英雄視される価値が成立した。武家の能力主義も影響を持ち、実際日本には貴族といった地位が存在しない。

(山本書店店主)



●日米の共通点

ジョン・モーア

(米国)



1. 日米の共通点

今回来日して、日米間を引き裂くことよりも両国間を調和することの方がはるかに多いことを認識した。時には競争を強いられる実業家の立場でもこのことを強く感じた。

奈良・京都の静寂さの中で日本にも永遠の存在を以て人間の存在を越える力を信じるという伝統が根強いことを感じたが、私達のように忙しい人間ほどそうした信仰が必要であると思う。今日家庭生活が危機に瀕してい

るが家庭は社会存亡の基礎であり家庭の問題を真剣に取り扱っていかうという認識が日米間に共通していることも感じられた。

2. 日米の懸案点

競争が極端に発展したものが経済戦争である。日本の意図は我々の仕事を奪うためだとする人がいるがそれは両国の仲違いをさせようとする人のいい口にすぎない。日本の側には固有のかつ偶発的な利点が多いと唱える人もいるが、私は、より良い仕事をしようという理念を実行してきた日本の経営が時宜を得たということであって、アメリカ側も日本を見習うことを強いられてきているのである。日本はいわば高い品質を再発明した訳で他の産業国は自分の市場を守るためにも品質を上げること躍起となっている。

3. 日米のパートナーシップ

共に勤勉な両国民がもっと触れ合うように努力をし合い、単に両国のためではなく全世界、特に途上国のために両方の良い点を活かしていくことが最も重要だと思う。

(米スコヴィル社副社長)

● マーシャルプランとMRA

フリッツ・フィリップス（オランダ）

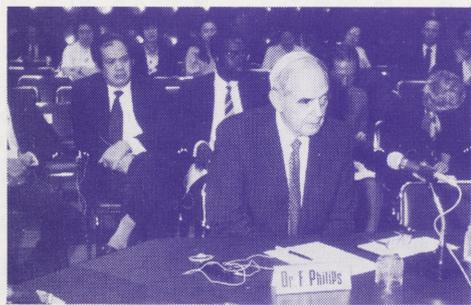
1. マーシャルプランとMRA

敵味方が隣接していた第二次大戦の欧州では密集した多くの都市が破壊されました。戦後の欧州を経済的に救ったのがアメリカによるマーシャルプランでした。しかし政治的には当時多くの憎しみが残されていました。そんな時MRAの会議を通して、独仏の指導者が初めて会して、欧州共同体の基礎作りができたのです。国同士が憎しみを超えるには個人個人が心の憎しみを超えることが先決でした。多くの友人を一同に失った私も憎しみを抱いてしまった罪をドイツ

人に謝ったのです。そしてこのドイツとの間で築かれた信頼が戦後の欧州繁栄の基礎となりました。

2. 日欧の交流

しかし欧州が違い日本にはあまり関心を示さないうちに日本はその勤勉さ、まとうりの良さ、高品質などの利点を生かして海外に進出してくるようになりました。私共フィリップス社では、日本を無視するのではなく日本にも直接入って一緒にやっという考え方でした。MRAの考え方は互いに理解をし合って共に未来を築くということにあります。近年毎年スイス・コーのMRA世界大会に数10人の日本の代表の方が足を運ばれていることがどんなにか役に立っていることでしょうか。相互理解があれば戦争や貿易競争の余地はないのです。私共の会社からも30名の管理者を日本に送って訓練を受けさせております。私は互いの繁栄を妨げる保護貿易主義には反対で、それよりもこうした交流の方が大切だと思います。



3. 正直な心の交流

日本人ほど外国人を礼儀正しく親切に歓待する国民はいないと思います。しかしそれだけでは何も起こらず、やはり本心をうちあげた交流が必要だと思います。私自身自国に日本の製品が流れ込むとどうもそれに対して変な感情をもってしまいう訳で、

私はそのことに関して正直に日本の皆様にお詫びしたいと思えます。日本が高品質の物を作れるということを認める勇気が我々の方に必要だと思います。正直にお互いをうけ入れ尊重し合うことが不可欠だと思うからです。

(オランダフィリップス社元社長)





民主カンボジア連合政府のソン・サン首相が国際MRA日本協会の招きに呼んで六月初め非公式に来日されました。これは連合政府樹立（昨年七月）以来、初の訪日となります。先に行われた小田原国際会議に参加していた子息のソン・スーベル氏らと合流し、安倍外務大臣など政府要人や人道援助団体との対談や交流等、多彩な日程を消化されました。その間の模様は新聞、テレビ等で広く報道されたのでお気付きの方も多いかと思えます。

ソン・サン首相は昨年モクメル人民民族解放戦線議長として来日され、田端のMRAハウスも訪問されました。又、昨半夏のスイス・コーでのMRA世界会議にも参加され、失つて初めて知った自由の貴さを一仏教徒としてヨーロッパやアフリカ、中近東の人々に語りかけ、深い感銘を与えました。

今回、MRA東京ダイアログ（別掲）にも特別ゲストとして出席され、カンボジアの現状および日本との関係について特別講演をされました。御紹介致します。（抜粋）

『カンボジア再建と日本』

きよう私は、アジアの中心に位置し多くの苦しみを体験したカンボジア人の心で日本の皆様の心に訴えたいと思います。と同時にカンボジアが日本から学ぶ点について申し上げたいと思います。

(一) カンボジアの心の再建
カンボジアは全てが破壊されました。その再建にあたって心の再建が真っ先に必要です。

クメールの歴史、言語、伝統、習慣、芸術そしてアンコールワットなどがクメールの心を形造っています。とりわけ仏教が重要です。カンボジアの宗教的自由は必ず回復されると思いません。何故なら、全てが破壊された想像を絶する虐殺が行なわれ宗教も絶滅の危機にさらされたものの、カンボジア人の内なる宗教心を一掃することは遂に失敗したからです。私共の解放村では既に仏教・回教・キリスト教などの宗教活動が復活しています。

生まれ変わるカンボジアの仏教はこれまでのように儀式はら

再建をはかるには日本からそのアドバイスをいただくことが至極当然といえると思います。

再建にあたって私共は良きクメールの伝統と近代的なものとの共存させたいと考えます。平和で汚染も少なく、資源と生産そして人口の配置のバランスのとれた国造りです。

〈カンボジアの産業〉
先づ私共は、規模は小さくとも人間的な資質を失わないで、農産物を活かせるような産業を育成したいと考えます。

(二) 日本とカンボジア
カンボジアの再建という仕事にあたり、多くの東南アジア諸国と同じように、私共はまず日本のことを考えます。アジアの一国である日本が今日のような発展を成し遂げたことを私共も誇りに思っています。シンガポールやマレーシアは最近「ルックイースト・ポリシー」や「日本的思考」を採っています。そのマレーシアのマハティール首相は最近「我々が最も学びたいものは日本の労働論理である」と述べておられます。

まさに石器時代まで後戻りしたカンボジア、元々農業国であるカンボジアが、仏教経済学にも則って速やかにかつ合理的な

そ我々カンボジアの指導者が一九七〇年以來失った叡知を取り戻す第一歩になると思っています。経済的側面における叡知とは持続性に基いたものです。人の必要を増長することは叡知や自由そして平和に逆行することです。

マハトマ・ガンジーは次のように言っています。「この大地は一人一人の必要を満たすものは充分与えるが人の欲を満たすほどはない。」と。

私達は多くの人々に活かされ、廉価で、小さな規模でも可能で、人々の創造性にも見あつた方法や設備を求めているわけです。

〈カンボジアの労働論理〉
仏教の見地から申しますと、

仕事の機能というのは少くとも三つあると思われま。

1、人に人の能力を開発する可能性を与えること、

2、他の人と共通の役目を担うことによって自分の自己中心的な考え方を克服すること。

3、人間らしい生活をするのに必要な財とサービスを生産すること。

家庭に続いて社会の基盤を為すのが仕事であり、仕事を通して築かれるのが人間関係だと思われま。

〈カンボジアの仏教経済〉
仏教経済においては、文明の本質とは人格の改良であり、労働こそがその人格を作りあげます。仏教者は物よりも人を、そして消費よりも創造的な活動を重んじます。仏教経済の特徴は

質素な生活と非暴力であります。解放されたカンボジアは開発への正しい道を見極めねばなりません。物質主義と伝統的な精神性との間の「中庸」の道歩むことです。

我が国を含めた小国のナショナリズムや自治と独立への願望の本質こそが地域開発への正しい対応策となります。特に貧しい国においては大きな都市での開発のみが進んで農村においては開発が遅れているという現状であります。

これまで申し上げましたような領域での日本の経験、アドバイス、そして援助こそが私共の国の再建に欠かせないものがございます。

三、日本の開国

「日出ずる国」日本は軍事大国になることなしに太平洋の大国となられました。そして日本が東南アジア諸国に対して政治的、軍事的な支配も経済的な野心も持たなければ、日本はアジア諸国を地域的覇権主義から護る兄弟国としてのモデルになれることと思われま。

カンボジアの解放に力を貸され、カンボジア・ラオス・ベトナムの再建に手をさしのべる日本は、東南

アジアの国々から恐れられるどころか愛され望まれる国となることでしょう。

私共カンボジア人は全てを失ってしまいました。命も、文化も、心も、そして自由もです。

ところが私達はこうした不幸の根をカンボジア以外にあると考えがちであります。実際には私達にふりかかったことは私達自身の責任であるのです。私共にも人間共通の弱点があつたのです。汚職・分裂・嫉妬・責任感の欠如などであり、これが私達の展望を誤らせたのでした。そしてこれこそが現在ののそしてこれまでの長い不幸の元凶なのです。一方、我々の敵は我々の伝統とは異質のイデオロギーを固く信じ世界的な戦略を有しています。我々仏教者はこの敵が持つに匹敵するほどの堅固な信仰を持ちあわせていなかったのです。

カンボジアの風土や精神にあまりにも反した共産主義がカンボジアで成功するとは私達には考えられませんでしたが、しかしながら一九七五年、汚職や内部対立につながった利己主義といった精神的、道義的な力の欠如が共産主義の支配を許すことになってしまいました。共

産主義のもつあの堅固な信念をみると、それにも勝るものを自ら持ちあわせないかぎり、たとえ日本といえども共産主義が成功しないとは言ひ切れないと思われま。

全てを失った私共から敢えて皆様にさしあげるとすれば、私達にこれほどの悲劇と苦しみを課したこの教訓だけでございます。

しかしこうした悲劇の中で私共カンボジア内に住めるカンボジア人は幸運であるといえ、しかも日本の方々の心を受容することができた数少ない国民の一つといえると思ひます。欧米をはじめ他の国々ではソニーやキヤノンといった日本製品を通して日本のテクノロジーのみを享受した中でカンボジアは日本人の心に触れることができたからです。日本人お一人お一人のイニシアティブで多くの援助がさしべられたのです。ここ二、三年の間に築かれた両国民の間の友情関係は新しいパートナーシップといえると思ひます。この二つのアジアの古い国によって何か新しい創造的なものが生まれてきていると思われま。

こうした救いの手を通して、カンボジア人が自分達の問題だけ

に心を奪われるのではなく、他国の温さというものを感ぜられるようになったと思ひますし、日本自身にとつても「ユニークさからユニバーサルへ」と発展するかけ橋となつたと思ひます。

それまで内にこもりがちであつた日本人の心が開かれ、うちひしがれていたカンボジア人の心も軽くなりました。今こそ日本とカンボジアがこうした共通の体験と教訓をアジア全体ひいては世界の為に活かす時であると信じます。カンボジア語から日本語になつた言葉が三つございます。うどん・カボチャ・そしてキセルです。また私共の解放村の二つに日本の名がつけられております。東京村と日本村であります。こうした日本の方々の親切にこの場をお代りいたしまして心からお礼申し上げます。

私共はカンボジアの伝統的な遺産・価値・心をもう一度復興させることができると思ひます。そしてこれは日本、カンボジア両国に伝統的な瞑想に聞き入ることによって可能であると思ひます。手を取りあつて日本の開国ひいてはアジアの開国のために共に立ちあがろうではありませんか。

あの時 この人

私が体験した三年間の海外生活

そのIII



市原登志子

◇英国へ渡る

貧困に病む国インドでの生活。そしてそのインドから到着した私にとっては胸が痛くなるくらい豊かな国スイスでの日々。この対照的な二つの国での数々の思い出を胸に、私が次の訪問地、伝統ゆかしき国英国へ足をふみ入れたのは七十九年九月のことでした。

英国ではロンドンにあるウェストミンスター・シアターというMRA運動の拠点となっていた劇場を中心に、子どもから大人まで、様々な人々を対象に幅広い運動がすすめられていました。ここでもチャリティとしてのMRAは多くの人々の献身と

信仰によって支えられていました。

私は、そのロンドンに二つあるMRAハウスのうちの一つであるフォーティフォー・チャールズストリートにお世話になることになりました。ここは番地がそのまま家の名称として使われていました。場所はロンドンの中心ですぐ近くにパッキンガム宮殿などの名所や観光地があり、高級ブティックがたちならぶボンドストリート、ピカデリーサーカスなどの繁華街の一角にありました。そのハウス自体もあるビジネスマンによってMRAに贈られたものですが、ハウスの各部屋を飾る美しい家具や調度品・食器なども多くの方々の遺品や献品であり、その品一つ一つについて様々な物語りが語りつがれていました。

日本にも数回来目されたワイズ御夫妻を中心に、違った国籍の人達約十五名が寝食を共にし、いわば一つの家族として生活をしています。私は家事のお手伝いをする事になりました。とにかく家族の人数も多いし、殆んど毎日とっていいほどお客さんや友人たちを迎えてのお茶や食事もあるので、お勝

手仕事にしても、ハウスキーピングにしても仲々大変な仕事でした。

◇ルームメイト

私のルームメイトはオーストラリア人で、明るく朗らかなベニーという女の子でした。彼女は私より年が一つ下でしたが、料理の専門家でもあり歌も上手で、みんなからも可愛がられていました。

その彼女と一諸に働くことになりました。しかし、いつも一諸の生活をしていくうちに、段々彼女との生活が私にとってわずらわしいものになってきたのでした。それは何のとりえもない私の、才能に恵まれている彼女への嫉妬から始まったのです。彼女が年下であるということも私のプライドを傷つけ、国民性の違いや言葉の障害も加わって感情のズレは次第に大きくなっていきました。そしてとうとう彼女に心を全く開けなくなってしまうしました。MRAで「人を指さすと三本の指が自分に帰ってくる」ということを再三聞かされていたのに、その時の私は心が完全に盲目となっていたのでした。他人はしょっちゅう心の中で批判しておきながら、自

分自身を省りみる事からはいつも逃げていたのです。

人というのは、逃げ場があるうちは己れの非を認めることが仲々できない、思いあがった存在だと思えます。私は自らがその逃げ道を断ち切らなければならぬんだということに気がつきましたが、それを決断するためにはMRAの四つの絶対標準（正直、純潔、無私、愛）をもう一度考え直さなければなりません。そして私ははじめから絶対正直を自分のものとして受け入れる決心をしました。私は自分の非を認めて、彼女に自分のこれまでの感情をすべて打ち明け、赦しを求めました。それ以外の方法はありませんでした。



た。彼女はこう言いました。「私もあなたといろいろな話しかできて、いい友達になれたらいいの」と思っていたけど、しょっちゅうあなたが『それどういう意味？、もう一度いつて』て聞くものだから、いいかげんめんどくさいなって思っていたの。私こそご免なさい。その時、彼女とはじめて心が通いあうのを感じました。

こうして自分のまちがいをつつ正してみると、次から次へと他の正すべきことが見えてきました。それはペニーに対してだけではなく、フォーティフォーの家族全員に対しても同じことでした。表向きはにこにことしていい顔をしていながら、心の中では一人一人に不平不満を持っていました。そのことで、自分がたいへん重い罪を犯していたように思われて心が痛みました。しかしそれを受け入れて家族一人一人にもあやまりました。みんながこんな私を暖かく受け入れてくれました。

これはどんな家庭にもいえることだと思いますが、特にこのフォーティフォーでの体験から、家族として生活を営む上で、

一人一人の愛とゆるしが平和な家庭を築く上で本当に必要なのだと感じました。

今、世界では国と国との相互理解が求められています。私はこうした小さな体験から、他の国の人々との個人レベルでの和解のつみかさねや心からの交流が、相手の国を理解し、いたわっていくことにつながるのだという確信を得たのです。(続く)



CAUX 1983

ヨーロッパのあるべき使命とは何か？

7月9日～18日

- ヨーロッパ個有のルーツ
- 少数民族と外国人コミュニティ
- 他の大陸との関係

未来に帆を向ける家族

7月25日～8月2日

- 社会に於ける家族：受身の存在か？社会を変える力か？
- 親と学校

南北アメリカとヨーロッパとの対話

8月5日～12日

- パートナーシップの代償（ツケ）
- 新しい展望と共通の目的の模索

アフリカ全大陸からの人々による主催

8月15日～22日

- 道義的、精神的革命、融和と進歩の基礎作りのために

健全な経済の前提条件

8月23日～28日

- 産業界や労働界の指導者及び政治的、経済的問題に関心のある人々のためのセッション



昭和五八年度コーMRA国際会議

眼下にレマン湖を望む絶景の地、スイスのコーで毎年開かれているMRA国際会議は、本年も既に世界各国より多数の参加者を得て活況のうちに開催されています。“明日の世界を担う一人一人の役割”をメインテーマに別掲のように様々なテーマで会議が継続的に行われ、70ヶ国以上3千名余の参加者がコーを訪れる予定です。この会議の目的は、国籍や年齢、男女を問わず全ての参加者が、明日の世界に対するそれぞれの役割を見出すことにあります。昨年参加した失業中のイギリスの青年はこう言っています。“私はコーに来た時、失業していたため落胆した気持ちでいました。それにここに来るまで英国だけが失業で苦しんでいるのだと思っていました。しかしコーで、第三世界では3億もの人々が職を得ることが出来ず、しかもそれに対する保障など殆んどないということを知り、目を開かされたのです。コーを去るにあたり、これから多くの人々に私のここで得た体験、そして見失っていた信仰をどのように発見したかを伝えていくつもりです”。日本からは7回目の参加となる東芝労使代表をはじめ、日産元副社長、現相談役大熊御夫妻など30名以上参加の予定です。次号のIMAJニュースで参加者のレポートを掲載します。



◇満足(その二)

「『人のアヘン』と呼ばれる宗教にとって替われるもの、それは実証主義を唱える無神論ではない。」とガラウディは書いている。「なぜなら、実証主義の世界では、神の存在だけでなく、人間の存在をも否定してしまうからだ。強い、創造力に富んだ『信仰』こそが、真に宗教にとって替わり得る。これによって、実際目に見えるものももちろんのこと、希望を持つことすらできなくなった人間の目に不可能と映る将来の可能性さえ、現実のものとなるろう。」

多くの人間が、神のことを「大いなる幻想」として無視するのかわかるような気がする。宗教の名を借りて行われた犯罪や、信心深いとされる人々の実際の

連載 ⑧

人と機構

イエーツ・ウィルヘルムセン

生活振りなどを見ていると「いったいこの世に、人間を越えた高潔さと英知の源など存在するのだろうか」と思えてくる。人が理念というものを悪用した場合、その理念そのものよりも、それを悪用した人間の方に問題があることが多い。

おごりや、偏見という落とし穴に落ちるのを避けるために必要なことは、自分の限界を知ることだろう。「自分は既に何でも知っている。」などと固く信じ込んでしまった人々は、より深い洞察への扉を閉じてしまっからである。

「マルクスの弁証法は、知識に対して常に批判的であり、しかもその知識というのは、事実を反映するものではなく、常に

変革を前提とした実証的な経験である、としている」とガラウディは書いている。「神学者のバースは、『私が神に関して述べたことすべては、私一人によって語られたにすぎない』と言ったがマルクス主義者もまた、自分が自然や歴史について話すことは何もかも、その個人によって語られたものであることを忘れるべきではない。もしこのような自己批判や相関的な要素なくしては、神学的な、又は革命的な考えは、終局的には、宗教裁判やスターリン主義の圧政をもたらす。」

我々の人生が疑惑や疑問であふれている時点で、自分の確信というものを決めてはいけない。人間というものは、そんな状況では満ち足りた生き方をし得ない。私達は皆、最上の真理を求めて、それに沿って生きていくべきである。私達は選択を迫られている。ソルジェニーツィンはこう言った。「正直になろうとしている人間にとって、逃げ道というものはない。いつの日か、我々の誰もが、次のどちらかの選択を強いられるだろう。真実か、それとも虚偽か——精神的な独立を求めるか、それと

も精神的な屈服と苦役とを甘受するかといった選択である。」

しかし、真実とは何だろう。宗教とは、自分を超越したいという人間の願望が生み出した産物で、神は人間の創造によるものだ。マルクスは考えた。だが、一方ではアインシュタインのように宇宙の真理を極めつくしたかのように見える人々の中には、マルクスとまるで正反対の意見を持つ人達がいる。

自分の生存の意義を知るためには、他の人々の考えに頼るべきではない。自分自身で体験し、試みることや、この問題の解答の発見へと通じる道を歩むことは、誰にでも可能なのだ。

◇信仰

私自身の場合、高校生の時に、神への信仰を捨て去ることを決心した。その理由の一つは、当時の自分の生き方が、私の信仰に根ざしていた道徳標準というものと、どうしても食い違っていたからだ。正直にいうてしまえば、当時自分が享受していたことを詮めるか、信仰を捨てるか、二つに一つの選択を強いられるのであった。結局私は、信仰を捨てる方を選んだのだ。

信仰を再び取り戻し始めたのは、大学生の頃である。懐疑的で目的がなく、妥協だらけの不毛の生活に嫌気がさしていたからだ。偏見抜きで、大人としてどんな生き方をしていくのか、はっきりとさせる必要があった。スコムリンスキーの他にも、

「良心の重要性」を強調する共産主義者は多い。私にとって、良心は、信仰への第一歩となった。我々の心の中に響く声には二つあり、一つは「正しいと思うことをせよ。」と言い、もう一つは、「自分の都合のよい方が、容易な方の道を選べ。」と言う。私は、十分に時間をかけて、この「内なる声」のもとに、自分のそれまでの人生を振り返ってみ、結論の一部を書き出してみた。この実験は、より現実に対応した人間となるために役立つようだ。そして、自分の家族のみならず、一部の人間に対してもとっていた、自分の卑劣な態度に気がついた。自分の人生哲学に影響を与えていた自分の性格を、はっきり見ざるを得なかった。悪魔としか呼ぶようなものの存在を、自分自身の中に見つけたことによって、私個人や社会に関する問題に対する

見方というものが、随分変わってきた。善と悪の戦いは避けてはいけないものだし、それはどんな人間、階級、人種、そして国家にも言えることである。

神の存在の有無の問題に関しては、自分で経験してみるしかない。そのための資料を求める際には、先入観抜きで心を開き、自分で実際に実験してみることである。私の場合、実験は、私に語り得る神の存在を仮定することだった。そしてその神とは、私が見出し出して実行に移すべき計画というものを持ち私が静かに耳を傾けるなら話しかけてくれるというものだ。この実験に先立って、私は一つの決心をした。当時はその存在すら疑っていた神に対して、私はこう言った——「もしいらっしゃるのなら、どんなお言葉にも従いますよ。」

られなかった人々を、助けることができたし、さじを投げていた問題にさえ、解決の糸口が見つかり始めたのが、自分にもわかってきたのだ。社会や世界の出来事に対して影響を与えることなど、個人の努力では不可能だと信じ込んで、孤立を決めこむ人々が多い。そういう人達は、各々のプライベートな領域のみに引きこもり、未来を、他人まかせにしてしまう。そう

しながら、自分の人生には生きがいがないなどと、不平不満を言い続けるのだ。

信仰というものを受け入れることによって、新たな可能性が開けていく。創造主は、創造した者に対して計画と使命を持っておられ、一人一人は、その実現のための役割を見出すことができる。このようにして、一人一人の努力が、神が人類のために持つておられる全体の計画の一部に、組み入れられていく。この共同作業を通じて、私達は一人一人に潜む真の可能性を見出すことだろう。人間の尊厳も高まる筈だ。このようにして私達は、自分の存在と行動が役立つという、心の充足感を得ることができる。

(続く)

MRA日本協会は社団法人化を目指して 会員数増加のキャンペーンを行っています。

国際MRA日本協会は昭和五十年に設立されて以来、世界各国のMRAチームの人々と共に手を携えて、調和ある産業や社会、さらには平和な国際関係の実現を目指して活動を続けてまいりました。

毎年開催される国際MRA会議もその一環であり相互理解と信頼の絆は年々強まっております。他にも人材育成のための研修生の海外派遣、研究会、講演会の開催等々、日本人の「心の開国」を推し進めるために活動してまいりました。

さて当初任意団体で発足いたしました当協会も、MRA事業の一層の拡大をはかるべく、社団法人化を目指すことになりました。これを機に会員の増加をはかるキャンペーンを開始いたしました。また、より

た。この機会にぜひ当協会に御入会下されますようお願い申し上げます。

御入会下された方には二ユース等の他に、各国での国際会議ならびに各種の会合の通知などその都度差し上げたいと存じます。

もし、御入会下されず場合は、入会申込書に必要事項ご記入の上、お送り下さい。

尚入会申込書は、ご連絡下さればすぐにお送りいたします。

●会費

個人正会員(年額)

1□ 1,000円

法人正会員(年額)

1□ 5,000円

●払込先(郵便振替が便利です)

郵便振替□座:

東京8138293

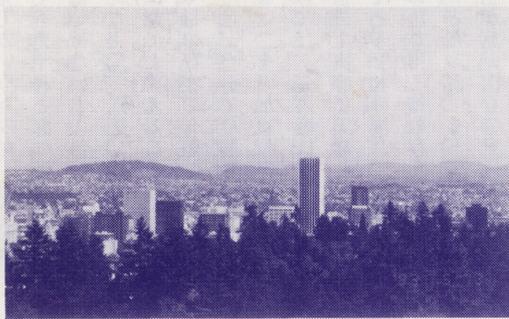
銀行□座:富士銀行動坂支店

(普)236-861220

入会御願ひ

気軽に会員となつて下される様に、これまでの個人会費年額 1□ 5,000円を 1□ 1,000円に変更させて頂きまし

ポートランド会議レポート



「バラの都」として、また3年前のセント・ヘレナ火山の爆発でも有名になったオレゴン州ポートランドで5月13日から15日までMRAアメリカ国際会議が開催された。日本からは国際MRA日本協会高瀬正二会長、聖母病院院長戸田慶一郎、同長女智子、ニューセントアンドリュース・ゴルフクラブ常務金子庸男、住友商事デナバー支店住友裕郎、それに事務局藤田幸久の6名の参加があった。

◆十八ヶ国二百名が参加

日本から輸出される車のほとんどはここで荷揚げされるといわれるほど日本とは深い関係にあるポートランドは、貿易摩擦問題が東部で起こっても日本製品を歓迎するほどの親日的な地域である。

ポートランド市のほとんどの人が何らかの形で見聞きしたと思われるほど、街中の様々な組織や会場で、この国際会議に至る二週間にわたってMRA主催の講演会が開催された。海外参加者による中東問題・南アフリカ問題・人種問題・東欧反体制者の問題・南北問題など「世界の流れを決める」提起がこの西部の都市の市民の間でも活発に討論された。

日本の高瀬会長は「相互理解に基いた日米間の新しいパートナーシップ」を訴え、「精神的な友好が平和を確かにする」とロータリークラブの講演で述べた。ポートランド市長への表敬訪問の際も、「日本の労使関係の安定、ひいては日本産業の今日の発展の基礎作りに貢献したMRAの働き」について率直に報告し、最近日本を訪問したばかりの市長も、日本について

の洞察を深めるこの話に聞き入っていた。住友裕郎さんは奥さんともっと正直に話し合うと決心したという誓いを閉会式で皆に語ってポートランドをあとにした。

会議には十八ヶ国約二百名が参加し、中にはアフガニスタンやソ連の亡命者も含まれていた。討論の他にも現在カナダ・アメリカ中を半年間回っている聖フランシス（アソシシ）の生涯を描いたミュージカル「貧しき人と豊かな人」の公演が行なわれた他、ソルジェニツインやジンバヴェエに関する最新の映画も上映された。

今回の感想を戸田慶一郎さんは次のように語っている。

「今大会は場所柄・アメリカ在住の人の参加が多く、そのせいで、アメリカ人特有のフランクさと、相手への思いやりの心を強く感じ取ることができた。

大会出席者全ての方々に接することは不可能であるが、どの会場でもやさしく高邁な精神に満ちていて、市井にあってさまざまな世相の中で喘いでいるかのような私にとっては、ここは一つの聖地のような気さえする

のである。その意味で、MRA会議への参加の旅は大きな目的のための、私の巡礼の旅と言えなくもない。

今回はまた娘を伴ったことで、思いがけない嬉しいハプニングに出逢う事になった。私達は会議後時間が余り、高瀬さんの提案で一日早く車でシアトルに向かうことになった。その途中娘がかつて一ヶ月間ホームステイをしたオリンピア市をかすめることがわかり、同行の金子さんがその時のホストファミリーにお逢いしてはどうか、という嬉しい提案をしてくれた。電話をしてみると幸運にも連絡がとれて逢う場所も決った。

若々しい感じのZ夫妻は、ニコニコと娘を笑顔で迎えて抱きしめて喜んで下さった。娘は感激の余り言葉も出なかった。ただ涙が頬を伝うばかりである。やがて彼女はいつの間にも用意していたのか、一枚の舞子の画を手渡した。それはいかにも素朴な発想ではあるが、自分の感謝の気持を託したかったのであろう。

この幸せな再会は皆さんの御好意によって実現した。幸せは一人の力では成り立たない。多



●中央が戸田慶一郎さん

くと人々の相手を思う心と献身とがあつてこそ、幸せはやってくる。

このチャンスを作ってくれた高瀬さんの「ひらめき」と一行の方々に対して心から感謝したい。